初修外国語の学び甲斐と教え甲斐

第 14 回関西スペイン語教師の集い

第 159 回関西スペイン語教授法ワークショップ（TADESKA）例会

ワークショップ 1

小川　雅美

日時：2023 年 2 月 18 日（土） 10:45 - 12:45

場所：立命館大学大阪いばらきキャンパス AC231 教室

Lo gratificante de aprender y de enseñar en los cursos de lenguas extranjeras

XIV Encuentro de Profesores de Español en Kansai

CLIX Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)

Taller 1

Masami OGAWA

Fecha y hora: Sábado, 18 de febrero de 2023, de 10:45 a 12:45

Lugar: Campus de Osaka Ibaraki de la Universidad Ritsumeikan, Aula AC231

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このワークショップは、全体での対話も交えた担当者の発表と、グループディスカッションで構成されるものであった。本報告では、そのうち主に担当者による発表について述べる。

1.　このワークショップの目的

このワークショップは、教育機関で外国語を学ぶ意義というテーマに、「学び甲斐」「教え甲斐」という新しい観点から全体で考察し、参加者が経験や意見を自由に述べ合うことを目的として行った。

2.　ワークショップの流れと内容

2.1.　アイスブレーク

自分たち自身の学習経験についての簡単な質疑応答を、参加者がペアを変えながら行っていった。まずは、教師が、教える人になる前に生徒として学ぶ人であったことを思い出し、学ぶ当事者の観点を呼び起こすことをねらいとした。

2.2.　「甲斐」の意味とそのスペイン語訳の検討

外国語教育の研究では、「動機づけ」「ニーズ」「満足」という用語やコンセプトは扱われてきたが、このワークショップでは「(～し）甲斐（がい）」というコンセプトから、外国語（私たちの場合はスペイン語）教育や学習の意義を考えることをねらいとした。日本語では「生きがい」「働きがい」「やりがい」という言葉がよく使われるが、スペイン語教育の研究ではなじみがないので、「甲斐」の語義と、これに対応するスペイン語を参加者とともに確認した。

「甲斐」とは、主に、労働を伴う行為を実行した結果として得られる満足感であり、価値の認識である。未実行の労働によって得られると期待される心理的効果を示す場合もある。このような意味に対応するスペイン語は lo gratificante となる[1]。また、名詞ではないが vale la pena もこの意味をよく表している[2]。これらのことから「学び甲斐」は lo gratificante de aprender、「教え甲斐」は lo gratificante de enseñar として、日本語とスペイン語の両方でこのテーマについて論じることができることが確認された[3]。

2.3. 「学び甲斐」と「教え甲斐」の関係についての試論

学校における教学についての伝統的なモデルは、教師が教えることを学生が学ぶことであった。学生にとっては、教えられる内容をどれだけ摂取できるかが学びの度合いということになる。しかし、このモデルを「甲斐」にまで適用することには無理がある。なぜなら、教師と学生は別々の行為主体だからである。両者が同時に「やり甲斐（教え甲斐・学び甲斐)」を感じることもあるだろうが、それは当然のことではなく、出会うこともあると考えるべきであろう。また、学校教育は学生の将来のために行われるものであるから、そのような「甲斐」が感じられるのは、教学活動の直後ではなくずっと先かもしれない。このため、教学活動に関わる「やり甲斐」について考察するには、「学び甲斐」と「教え甲斐」を、まずは分けて考える方がよいと思われる。

2.4. 「学び甲斐」についての学生たちの声の紹介

私たちは、自分たちが教師として教育について考えるため、教える立場から発想しがちである。しかし、まずは、授業内容を学ぶ立場である学生たちの声を取り上げることにより、教える立場としてのバイアスを減らすようにした。担当者は、2022 年度の学年末に、あるクラスで学生たちに負担の少ない方法で「スペイン語の学び甲斐」について述べてもらった[4]。それらを総合するとおおむね次のことが言える。

---

[1] 日本語とスペイン語との間で、同義であっても品詞がぴったり対応しない場合もある。「甲斐」は名詞だが、同義の gratificante は形容詞であり、この語の名詞形 gratificación は金銭的な報酬を想起させ、意味がずれてしまう。このため、「甲斐」に対応するスペイン語は、形容詞の前に中性定冠詞を置いて句として名詞の機能を持たせる lo gratificante ということになる。本ワークショップ内でネイティブの参加者とともにこの点を確認することができた。

[2] Vale la pena は「価値がある」という意味の定型表現だが、直訳すると「苦痛に値する」となることから、「～し甲斐がある」という日本語とよく対応する。

[3] 今回の「教師の集い」の終了時にネイティブの参加者からいただいたコメントに sentirse recompensados という表現があった。これも「甲斐」を表現するスペイン語として使用できる。

[4] 1 つの大学では、第 2 外国語として 2 年間受講した学生たちに、期末試験の後の余った時間にメモを書いてもらっ

・　自分にとって新たな言語と文化を知ることができた。
・　授業で学んだ内容を自分の既有知識とつなぐことができた。
・　ネットのスペイン語の記事やインタビューが少しわかるようになった。
・　機械翻訳を使うにせよ、なぜそのような翻訳になるのかがわかった。
・　見覚え、聞き覚えのある言葉がスペイン語であると気づいた。

ある学生は、「スペイン語を学んだ2年間はとても難しく大変な期間でしたが、苦痛ではなくむしろ楽しく学べた印象でした」とコメントしている。上にまとめた 5 つの内容は、いずれも本人の努力によって到達できることなので、このコメントと整合性を持つ。学習活動という一種の労働によって得られた自己効力感であり、まさに「学び甲斐」と言えるであろう。

逆に、学び甲斐を感じられなかったという学生の声も記しておきたい。これは別の大学の学生で、受講期間は 1 年であった。前期は大変熱心に受講していたが、後期終了後の雑談では、学び甲斐があまり感じられなくなってしまったと語った。この学生が強調していた理由は次の 2 点である。

・　自分の所属学部全体も自分の周囲の学生たちも、外国語については英語を圧倒的に重視しており、スペイン語など他の言語の価値づけが低かった。
・　自分としてはスペイン語の勉学に努めたのに、その努力が試験で測られている実感が持てなかった。試験勉強の努力に対して試験の成績に対する配分が少なかった。また、参照条件が緩く、あまり勉強する気になれなかった。

このひとりの学生のコメントだけでは一般化した議論はできないが、「学び甲斐」を考えるヒントになりうる。

2.5.　「学び甲斐」についてのグループディスカッション

ここで、本ワークショップでは、参加者が 4〜5 人のグループに分かれて、「学び甲斐」についてディスカッションを行った。議論を整理しやすいように、学生が「学び甲斐」をどのタイミングで感じるかについて「受講中」「受講後」「将来」に分けて話し合うようにしてもらった。

た。試験用紙を利用し書いた人の名前がわかるため、授業に対して否定的なコメントを避けた可能性もある。難しかったというコメントは複数あったが、「学び甲斐」そのものへの否定的コメントは見られなかった。別の大学では、第2外国語として1年間受講した学生 1名と雑談する機会があったので、ざっくばらんに声を聞かせてもらった。いずれも、学生からの受講の感想の原因を探ったり、授業やカリキュラムの是非を問題にすることが目的ではない。また、これらの感想は、担当者の授業だけではなく学生たちが受講したスペイン語クラス全般についてのものである。

2.6.　「教え甲斐」について

「教え甲斐」について、担当者は 2 つのモデルを提示した。まず、教師が自分の知識や技能を学生に伝授すること自体に「教え甲斐」を感じる場合である。このモデルでは、知識や技能において勝っている教師が、劣っている学生に上から伝授するという力学がある。もう 1 つのモデルは、学生から発せられる行為（その結果としての言語表現）に教師が手応えを感じる場合である。どちらのモデルもありうるが、学生による活動が重視される近年の教育では、後者のモデルから「教え甲斐」を得られる方が、教師にとって望ましいであろう。ところが、機械翻訳の普及で、学生の表出する言語表現が自分で生み出したものかどうかわかりにくくなってきた。さらに、このワークショップのほぼ直前には、ChatGPT の普及について大きく報道され[5]、学ぶ側であれ教える側であれこれまでなされてきた努力が AI に取って変わられるかもしれない状況が、突然眼前に現れた。このことは、期せずして、「教え甲斐」にも「学び甲斐」にも大きな影響を及ぼすと考えられる。

ワークショップは、この後、時間がやや不足気味となったため、予定していた 2 つめのグループディスカッションを取りやめ、その代わりに全体ディスカッションを行った。そこでは、「教え甲斐」そのものよりも ChatGPT およびその教育への影響が話題となった。

3. 本ワークショップについての担当者のコメント

以上、このワークショップでは、「甲斐」という言葉に着目し、外国語の教学活動というコンテクストにおける「やり甲斐（学び甲斐・教え甲斐）」について参加者とともに考える試みを行った。学習者、教授者の心理について従来とはやや異なる観点を導入できたことは肯定的に評価できると考える。その一方で、このテーマについて手探りの状態であり話が未整理であったことと時間配分がアンバランスであったことについては改善の必要がある。最後に、今回のワークショップから得られる示唆として、次の 3 点を挙げる。

・学習者が「学び甲斐」を感じるタイミングは、受講期間中ではなく将来かもしれない。学校教育とは本来若者の将来のために存在している以上、長期的視野が欠かせない。
・今後の教学の場では、生成 AI の介在によって学びの実像が見えにくくなり、教師が手応えを感じにくくなる可能性がある。しかし、そのような時代だからこそ、「甲斐」という生身の人間の実感は、教学活動の価値を測る大きな鍵の 1 つとなるのではないか。
・「学び甲斐」は学習者本人に自然に生じる実感である。これを教える側が押しつけるのではなく、学習者にとっての学び甲斐を推し量りながら、自らの教え甲斐も追求することが重要であろう。

[5] ChatGPT は 2022 年秋にはある程度知られていたが、2023 年 2 月 1 日に高性能の ChatGPT Plus がリリースされ、それ以降 ChatGPT に代表される生成 AI の話題が世界を席巻することになり、特に教育界では大きなインパクトが生じた。本ワークショップ担当者自身は、2 月初めて ChatGPT についての報道を知った。